

「心の支援者」の資質としての 「寛容性」についての研究

－心理的 well-being の視点から－

A Study of Forgiveness as an Attribute for Mental Supporters:
A View Point of Psychological Well-Being

矢嶋文哉・宮岡佳子

Bunya YAJIMA, Yoshiko MIYAOKA

要 約

【目的】「心の専門家」、「対人援助職者」、「宗教家」等「心の支援者」と呼ぶべき人への社会的要請が高まっている。本研究は、この「心の支援者」に求められる「心理的 well-being」を通して、「寛容性」という資質に着目することにより、「心の支援者」の特性を検証していくことを目的とする【方法】「心の支援者」群として臨床心理士、キリスト教聖職者の合計71名、また比較対象群としてキリスト教一般教会員139名に対して質問紙調査を実施した。質問紙は、フェイスシート、Big Five 尺度、日本語版 Heartland Forgiveness Scale、心理的 well-being 尺度よりなる。【結果】①「心の支援者」は「寛容性」、「心理的 well-being」がともに高く、また②「心の支援者」の「寛容性」の高さは、「心理的 well-being」の高さに関係していた。さらに③「寛容性」の高い「心の支援者」は、「調和性」が高く、「情緒不安定性」が低いとの傾向も示された。加えて④共分散構造分析を行った結果、「心理的 well-being」に対して、「外向性」、「開放性」、「調和性」、「自己・状況寛容」が正の影響を与える関係が明らかとなった。【結論】「心の支援者」にとって「寛容性」は重要な資質であることが示された。

キーワード：心の支援者、寛容性、心理的 well-being、心理士、聖職者

Abstract

<Aims> Mental supporters such as psychological professionals, healthcare or welfare professionals, or religionists are more needed. In this study, we explored the characteristics of mental supporters by focusing on the concept of “forgiveness”.

<Methods> We administrated questionnaires for 71 clinical psychologist or Christian religionists. We named them as “mental supporters” who’s work was to psychologically help people. We also handed out questionnaires for 139 Christians who are not leaders. The questionnaire consisted of a face sheet, the Big

Five Scale, the Heartland Forgiveness Scale, and the Well-being Scale.

<Results> 1) The mental supporters had higher forgiveness and higher psychological well-being. 2) Higher forgiveness was positively associated with higher psychological well-being in the mental supporters. 3) The mental supporters who had high forgiveness possessed high agreeableness and low neuroticism. 4) By using covariance structure analysis, it revealed that psychological well-being was positively influenced by extraversion, openness, agreeableness and forgiveness of self and situations.

<Conclusion> This study indicated that forgiveness was an important attribute for mental supporters.

I 問題と目的

1. 「心の支援者」

昨今「心の支援」が注目されている。例えば、東日本大震災以降の被災者支援としてである。また、こうした被災者支援のみならず、私たちの回りには「心の支援」を求める者が年々増え続け、その対応として、いわゆる「心の支援者」と呼ぶべき人への社会的要請が高まっている。「心の支援者」とは精神科・心療内科の医師、臨床心理士、産業カウンセラーといった「心の専門家」から、医療、教育、福祉の領域等で活躍する看護師や介護士さらには学校の教師等の「対人援助職者」、そして牧師、僧侶等宗教の立場で「心の支援」を行う者まで、幅広くカテゴライズが可能である。本論では、「心の支援者」とは、広く人と関わりを持つサービス業で、人の心の支援、援助を多少なりとも行う役割を担う者と定義する。

2. 「心の支援者」をめぐる問題－バーンアウトについて－

従来より、対人援助職者については、バーンアウト（燃え尽き症候群）の深刻化が問題視されてきた。Price&Murphy(1984)は、「バーンアウトとは、理想に燃え使命感にあふれた人を襲う病」と述べている。特に、医療、教育、福祉等の公共的なヒューマンサービスの領域では高い理想と使命感を持って職務に従事する者が少なくない。仕事と個人の目標が一致するとき、さらに自らの職務への動機づけがなされ、達成感を得ることとなるが、全資源を投入したにもかかわらず、目指していた価値を得られない場合については、燃え尽きたように意欲を失い、職を離れることすらある。これがバーンアウトである。こうしたバーンアウトの原因について、久保（2007）は、バーンアウトの原因は、性格や年齢等の個人要因と、過重労働、自律性、役割ストレス等の環境要因、さらにはヒューマンサービス職固有のサービスのやり取りに伴う感情労働という視点で論じ、ヒューマンサービス従事者の特性、あるいはその職場環境が、バーンアウトの発症と密接に関係しているとしている。

結果して、昨今バーンアウトは、「心の専門家」である医師の領域（井奈波・井上，2010）でも、また臨床心理士の領域（小堀，2008）でも、そして宗教家である僧侶や牧師の領域（藤掛・衣笠，2010）

でも報告されている。つまり「心の支援者」に深刻な問題となりつつあるといえる。

3 「心の支援者」に求められるもの

一方、公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会のホームページには、「臨床心理士とは」という項目の中で、「^{こうまい}高邁な人格性の維持、研鑽に精進する」、さらに「“心の専門家”である臨床心理士は、自分という直接的な人間関係と心を用いるため、臨床心理士自身の“人間的資質”“倫理観”が大きく問われる」、「従って自ら心身を健全に保つように努め」と記されている。すなわち、臨床心理士は心理臨床能力の向上とともに「高邁な人格性」、「人間的資質」、「自ら心身を健全に保つこと」等が求められている。さて、こうしたことは、人の命を扱う医師や看護師にも、当然、同様にあるいは、それ以上に求められているといえる。また、牧師や僧侶等聖職につく者（以下聖職者という）においては、人に道を説く者、その宗教の教えを説き、いわゆるモデリングとなる者であるから、自明の理と言わざるを得ない。

さて、バーンアウトについては、環境要因の他に感情の抑制や鈍麻、緊張、忍耐等を不可欠の職務要素とする「感情労働」という視点で議論されてきた。この感情労働の領域でバーンアウトするリスクの高い人とは、職務上付与された役割と自分の人格とを分けてとらえることのできない人、つまり、職務上の役割に伴うクライアントからの反応を自分個人の人格に向けられたものとして捉え、思い悩んでしまう人だとされている（Hochschild, 1983）。従って、バーンアウトへの対処行動として、Hochschild は「自分自身と職務上の役割とははっきり分ける」ことが必要だと述べている。また、Lief & Fox(1963)は、このような態度を「突き放した関心」と呼んでいる。久保（2007）は、「突き放した関心」とは、クライアントに共感し過ぎたために、冷静な判断ができなくなったり、クライアントと同じ「重荷」を背負ったがために、心身ともに消耗してしまったりすることを防ぐための技能であり、またこの高度な技能がヒューマンサービスの従業者として高いレベルの仕事を維持しながら、心身的な消耗を回避する効果的な対処法だと述べている。

4. 「心の支援者」の資質

1) 資質について

対人援助職者の資質について、飯田（2010）は資質という概念を大きく2つに分けた。すなわち、一つは「広く乳幼児期や児童期、思春期や青年期などにおいて、親や家族、その他の自分の周囲の人間との関わりの中から得られたもの」、もう一つは「自ら得てきたさまざまなものをさらに自分自身研鑽を積んで深めていったり、周囲との関わりの中からさらに磨いていったりしたもの」とした。この定義に基づき、飯田（2013）は次のような概念図を想定した。

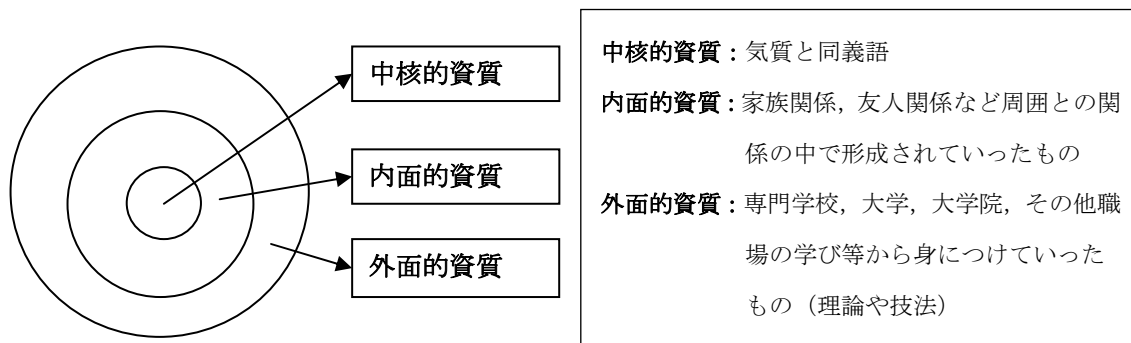


図 1 資質の概念図（飯田，2013 より改変）

本論では、基本的にこの概念を支持し、論を進めることとする。

2) 「心理的 well-being」の必要性

前述のとおり、「心の支援者」には、資質に高いレベルが求められるとともに、「自らの心身を健全に保つこと」等が必要とされている。従って、「心の支援者」においても被支援者に対する時に、第一に精神的に健康な状態であること、さらには、資質に高いレベルが求められることを考慮すると、心理的に成熟していること、すなわちいかなる環境のもとでも「心の支援」を行い得る人材が求められていると考えられる。それでは「精神的に健康」で、かつ「心理的に成熟している」とはどのような状態をいうのだろうか。精神的健康には、これまで大きく分けると2つの視点から検討されてきた。「主観的幸福感」と「心理的 well-being」である。主観的幸福感は、さまざまな日常生活の事柄をポジティブに感じられる精神的状態を健康であるとする立場であり、生活満足を認知的指標として用いてきた。これに対して、「心理的 well-being」は、本来の自己のイメージに向き合い、自己に一致した人生を生きようとする、あるいは、意味ある人生を希求するといった精神的状態を健康と捉える考え方である（澤田ら，2004）。Ryff(1989)によって提唱された概念である。

あらためて「心の支援者」に求められる精神的健康について考えてみると、日常的に心が安定した精神状態であることは必要であるが、「心の支援者」として求められる精神的健康は、人生における様々な危機に挑戦し、乗り越える自己実現的要素が多く含まれることが考えられる。従って、「心理的 well-being」は、人生全般の危機への挑戦による成長、発達の心理的様相を示すと言われている（Keys&Ryff, 1998）ことを考え合わせると、「心の支援者」の精神的健康を表すのに最適の指標といえよう。

3) 「寛容性」の視点

私はかつて学校臨床現場で「寛容性」について考えさせられる経験に遭遇した。「心の支援者」の代表格である教師であったが、その「教育力」と「寛容性」のアンバランスさを感じたことにより、逆に「寛容性」について調査研究を始めるきっかけとなった。すなわち、「心の支援者」に必要な「共通の資質」として「寛容性」について着目したのである。

本研究で取り上げる「寛容性」は“forgiveness”であり、「許し」に近い概念である。Thompson & Snyder (2003)は、「自分を傷つけた相手や出来事、状況に対する認識の再構築—つまり、それらに対する考え、感情または行動を、ネガティブなものからニュートラル、もしくはポジティブなものへと変化させた結果」と定義づけている。この定義に基づいて、Thompson, et al. (2005)は、自己、他者、そして誰もコントロールすることのできない状況に対する「寛容性」の尺度として The Heartland Forgiveness Scale (HFS)を開発している。

また、加藤・谷口 (2009) は、『許し』すなわち“forgiveness”は、宗教学や社会学で主に論じられてきたが、1990年代に入り、心理学を含め実証主義的な領域において注目されるようになった。研究が注目された背景には、臨床への応用の成果と『許し』が精神的な健康を導くという理論的根拠と実証研究がある」と述べている。

4) 「寛容性」と「心理的 well-being」との関連性

こうしたことから、長内・古川 (2005) は、「寛容性」がさまざまな「心理的 well-being」と関連があることを次のような実例を上げて述べている。すなわち、例えば、「寛容性」は愛、思いやり、信頼、共感性、同情等を助長させる (McCullough, et al., 1998; Worthington & Wade, 1999) との報告や、また、いくつかの研究では、Big Five の「調和性」と「寛容性」との正の相関関係が確認されている (Emmons, 2000; McCullough, et al., 1998; Worthington & Wade, 1999)。さらに、「寛容性」の高い者は、そうでない者よりも Big Five の「神経性傾向」が低いこと (McCullough, 2000) も報告されている。

また、「寛容性」を測る尺度には、大きく2つに分類され、一つは、「特定の相手や場面に対する寛容性」 (nondispositional forgiveness) を測る尺度であり、もう一つはある程度普遍的で変化しにくい「個人の傾向としての寛容性」 (dispositional forgiveness) を測定する尺度である。McCullough & Witvilliet (2002) は、「特定の相手や場面に対する寛容性」がメンタルヘルスや well-being と無関連であるのに対して、「個人の傾向としての寛容性」は、メンタルヘルスや well-being と重要な関連があると指摘している。さらに、Mauger, et al. (1999) は、他者に対する寛容性に比べ、自己に対する寛容性の方が、抑うつ、不安、怒り等のメンタルヘルスと強い関連を示すことを報告している。以上の先行研究から、長内・古川 (2005) は、「個人の寛容性を測定することは、人々の精神的健康をサポートする上で極めて重要な見地である」と述べている。

5. 研究の目的

本研究では、「寛容性」(forgiveness)という資質が、「心の支援者」が支援を行う際に共通として持つ資質ではないかという仮説から論を始めた。また、先行研究では、「心の支援者」にとって必要とされる「心理的 well-being」と「寛容性」の関連がさまざま述べられてきた。

そこで、本研究では、**研究1**として、まず「心の支援者」には「寛容性」が高く備えられているかどうかについて検証し、それをもとに「心の支援者」の「寛容性」を含めた資質と「心理的 well-being」の関係性について多面的に分析することを目的とする。また、**研究2**として研究1の結果を踏まえ、Big Fiveの5因子特性、「寛容性」と「心理的 well-being」間の一般的な因果関係を検討するために、重回帰分析、共分散構造分析を用いて分析を試みる。

II 仮説 (研究1について)

仮説1 「心の支援者」は「寛容性」が高い。

仮説2 「心の支援者」は「心理的 well-being」が高い。

仮説3 「寛容性」が高い「心の支援者」は、「心理的 well-being」が高い。

仮説4 経験年数が長い「心の支援者」は「寛容性」が高く、「心理的 well-being」も高い。

仮説5 「心の支援者」の「寛容性」、「心理的 well-being」には性別による差がある。

仮説6 「寛容性」が高い「心の支援者」は、「情緒不安定性」が低く、「調和性」が高い。

III 方法

1. 対象者

本研究では、「心の支援者」として、臨床心理士40名(回収率87%)、キリスト教の聖職者31名(回収率86%)を対象とした。キリスト教一般教会員139名(回収率70%)を比較対象群とした。「心の支援者」の中でも、主に「心理的」支援を専門として行う者(「心の専門家」と「心の専門家に準じた者」)を対象とした。

2. 調査時期

2014年6月初旬～2014年7月末の間に行った。

3. 調査方法および倫理的配慮

臨床心理士に対しては、本研究の趣旨と同意について説明した文書を添付した調査用紙を、教員、

研究責任者・分担者を通じて手渡し、郵送で回収した。キリスト教関係者に対しては、研究分担者が教会内で、調査用紙を個別に手渡し、回収箱により回収した。なお、無記名の質問紙の返却を以て、研究への同意とした。また、本研究は跡見学園女子大学文学部臨床心理学科倫理委員会（受付番号14008）において承認を得ている。

4. 測定尺度

1) フェイスシート

年齢、性別、臨床経験年数、信仰年数について訊ねた。

2) Big Five 尺度

人の性格をはかる尺度として、Big Five 尺度（和田，1996）を使用した。性格特性論の立場から人の基本的性格特性が5次元で記述できるとする、いわゆる Big Five 理論をもとに、本尺度は和田によって作成された。信頼性、また妥当性は併存的妥当性ないし収束的妥当性が高いことが証明されている。外向性（話し好き・陽気な・社交的 等について問う）、情緒不安定性（悩みがち・不安になりやすい・動揺しやすい 等について問う）、開放性（進歩的・臨機応変な・興味の広い 等について問う）、誠実性（計画性のある・勤勉な・几帳面な 等について問う）、調和性（温和な・良心的な・協力的な 等について問う）の5下位尺度からなり、全60項目から構成される。7件法で回答を求めた。

3) 日本語版 Heartland Forgiveness Scale

Thompson, et al. (2005)は、自己、他者、そして誰もコントロールすることのできない状況に対する寛容性尺度 The Heartland Forgiveness Scale (HFS)を開発した。長内・古川(2005)はHFSを翻訳し、日本語版の寛容性尺度を作成した。再検査法の結果から信頼性が確認されている。また The Transgression-Related Interpersonal Motivations Inventory (TRIM) 日本語版と Forgiveness of Others and Forgiveness of Self Scales (FOFS) 日本語版との相関関係から構成概念妥当性が確認されている。「自己・状況に対する寛容」と「他者に対する寛容」の2下位尺度からなり、全14項目で構成されている。7件法で回答を求めた。

4) 心理的 well-being 尺度

心理的 well-being 概念及び心理的 well-being 尺度 (Ryff&Keys, 1995) に基づいて、西田 (2000) が作成した心理的な発達、成熟の程度を測定する尺度である。信頼性、妥当性については確認されている。「人格的成長」、「人生における目的」、「自律性」、「環境制御力」、「自己受容」、「積極的な他者関係」の6下位尺度からなる全43項目で構成されている。6件法で回答を求めた。

IV 結果

1. 対象の背景

「心の支援者」は、臨床心理士 40 名と聖職者 31 名の合計 71 名（男性 15 名，女性 56 名），平均年齢は 49 歳，経験年数は 21 年であった。比較対象群の一般教会員は 139 名（男性 52 名，女性 87 名），平均年齢は 55 歳であった。全体では 210 名（男性 67 名（32%），女性 143 名（68%）），平均年齢は 53 歳であった。

2. 「心の支援者」の各尺度の平均値，下位尺度間の相関

「心の支援者」における各尺度の平均値を表 1 に示す。

表 1 各尺度の平均値（心の支援者）

		<i>M</i>	<i>SD</i>
Big Five 尺度	外向性	55.0	10.92
	情緒不安定性	45.4	14.33
	開放性	50.6	9.59
	誠実性	52.6	9.09
	調和性	57.7	10.37
寛容性尺度	自己状況寛容	45.5	7.23
	他者寛容	24.1	4.98
	寛容性合計	69.6	11.40
心理的 well-being 尺度	人格的成長	39.0	5.67
	人生の目的	37.2	7.63
	自律性	31.9	5.24
	自己受容	28.4	5.55
	環境制御力	24.9	3.75
	積極的他者関係	26.1	4.97
心理的 well-being 合計		187.5	24.48

「寛容性」の下位尺度 2 尺度間および「心理的 well-being」の下位尺度 6 尺度間において、質問項目数が異なるために点数の比較はできない。Big Five 尺度の 5 因子特性の中は項目数が同じのため比較が可能である。この中では「調和性」が 57.7(SD=10.37)，「外向性」が 55.0(SD=10.92)と高く，一方「情緒不安定性」は 45.4(SD=14.33)であった。

次に、「心の支援者」における各尺度間の相関を表2に示す。

表2 各尺度間の相関（心の支援者）

	外向性	情緒不安定性	開放性	誠実性	調和性	寛容性	心理的 Well-Being	経験年数
外向性	—	-.407**	.617**	.364**	.351**	.441**	.639**	.118
情緒不安定性		—	-.359**	-.280*	-.444**	-.682**	-.637**	-.404**
開放性			—	.369**	.287*	.449**	.605**	.038
誠実性				—	.289*	.332**	.375**	.300*
調和性					—	.609**	.494**	.145
寛容性						—	.685**	.261*
心理的 well-being							—	.155
経験年数								—

* $p < .05$

** $p < .01$

「寛容性」は、「外向性」、「開放性」、「調和性」、「心理的 well-being」と有意な比較的強い正の相関があり、また「誠実性」と有意な弱い相関があった。一方「情緒不安定性」とは有意な比較的強い負の相関を示した。「心理的 well-being」は、「外向性」、「開放性」、「調和性」、「寛容性」と有意な比較的強い正の相関があり、また「誠実性」と有意な弱い相関を示した。一方「情緒不安定性」とは有意な比較的強い負の相関があった。「経験年数」は、「誠実性」と「寛容性」と有意な弱い正の相関があり、一方「情緒不安定性」とは有意な比較的強い負の相関を示した。しかし、「心理的 well-being」とは有意な相関を示さなかった。

3. 「心の支援者」と一般教会員の「寛容性」、「心理的 well-being」についての比較

表3 寛容性、心理的 well-being の差（「心の支援者」、一般教会員）

	心の支援者		一般教会員		t 値
	M	SD	M	SD	
寛容性	69.6	11.40	64.9	10.65	2.963**
心理的 well-being	187.5	24.48	176.9	25.45	2.876**

** $p < .01$

仮説 1, 2 を検証するために、「心の支援者」と「一般教会員」の「寛容性」と「心理的 well-being」の平均得点について t 検定を行った。その結果、「寛容性」($t=2.963, df=208, p<.01$), 「心理的 well-being」($t=2.876, df=208, p<.01$) とともに「心の支援者」が「一般教会員」に比べ有意に高い得点を示していた (表 3)。

4. 「心の支援者」の「寛容性」高群・低群の「心理的 well-being」についての比較

仮説 3 を検証するために、まず「心の支援者」の「寛容性」の平均点を基準として、「寛容性」高群と低群に分けた。さらに、「心の支援者」の「寛容性」高群と「寛容性」低群の「心理的 well-being」の平均得点について t 検定を行った。その結果、「心理的 well-being」($t=4.408, df=69, p<.001$) について「心の支援者」の「寛容性」低群よりも「寛容性」高群の方が有意に高い得点を示していた (表 4)。

表 4 心理的 well-being の差 (「心の支援者」の寛容性高群, 寛容性低群)

	寛容性高群		寛容性低群		t 値
	M	SD	M	SD	
心理的 well-being	200.4	21.68	177.5	21.85	4.408***

*** $p<.001$

5. 「心の支援者」の経験年数高群・低群の「寛容性」, 「心理的 well-being」についての比較

仮説 4 を検証するために、まず「心の支援者」の「経験年数」の平均点を基準として、経験年数高群と低群に分けた。「心の支援者」の経験年数高群と経験年数低群の「寛容性」の平均得点について t 検定を行った。その結果、「心の支援者」の経験年数高群と経験年数低群の得点差は有意ではなかった ($t=1.843, df=44.473, n.s.$)。また、「心の支援者」の経験年数高群と経験年数低群の「心理的 well-being」の平均点についての比較を行った。その結果、「心の支援者」の経験年数高群と経験年数低群の得点差は有意ではなかった ($t=1.08, df=45.277, n.s.$)。

6. 「心の支援者」の性別による「寛容性」, 「心理的 well-being」についての比較

仮説 5 の「心の支援者」の性別による「寛容性」, 「心理的 well-being」の違いを検証するために、男女の「寛容性」と「心理的 well-being」の平均得点について t 検定を行った。その結果、「心の支援者」の男女による「寛容性」($t=1.017, df=69, n.s.$) の得点差, 男女による「心理的 well-being」($t=.439, df=69, n.s.$) の得点差はともに有意ではなかった。因みに、「心の支援者」と一般教会員を合わせた全体では、男性の「寛容性」より女性の「寛容性」の方が有意に高かった ($t=2.784, df=208,$

$p < .01$)。また、男性の「心理的 well-being」より女性の「心理的 well-being」の方が有意に高かった ($t=2.495, df=208, p < .05$)。

7. 「心の支援者」の「寛容性」高群・低群の情緒不安定性、調和性についての比較

仮説6の検証のために、「心の支援者」の平均点を基準として分けた「寛容性」高群と低群のBig Five尺度の情緒不安定性、調和性の平均値についてt検定を行った(表5)。その結果、「心の支援者」の寛容性高群は、寛容性低群に比べて、情緒不安定性が有意に低かった ($t=3.244, df=69, p < .01$)。また、「心の支援者」の寛容性高群は、寛容性低群に比べて、調和性は有意に高かった ($t=4.124, df=69, p < .001$)。

表5 情緒不安定性、調和性の差（「心の支援者」の寛容性高群、寛容性低群）

	寛容性高群		寛容性低群		t 値
	M	SD	M	SD	
情緒不安定性	39.5	12.77	50.0	13.94	3.244**
調和性	62.9	8.89	53.7	9.93	4.124***

** $p < .01$ *** $p < .001$

8. 「心の支援者」の「寛容性」に対する5因子特性、心理的 well-being の影響（重回帰分析）

また、同じく仮説6の検証のために、「心の支援者」を対象として、「寛容性」を従属変数とした重回帰分析を行った。独立変数にBig Five尺度の下位尺度並びに心理的 well-being 尺度を設定した。その結果、「寛容性」には、「情緒不安定性」が有意な負の影響を、一方「調和性」と「心理的 well-being」が有意な正の影響を与えていた。以下に、重回帰分析に基づくパス図を図2に示す。

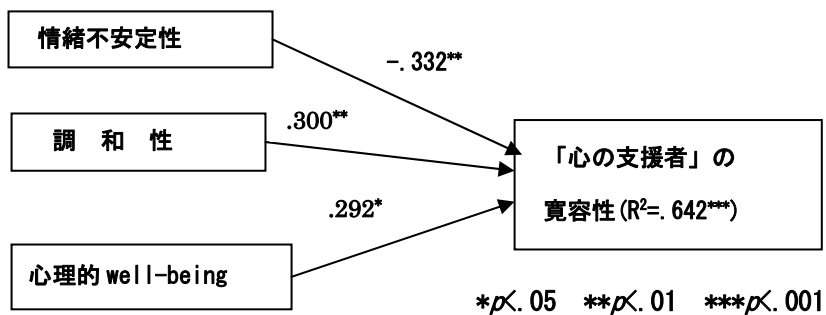


図2 「寛容性」に対する影響（心の支援者）

9. 対象者全体における「心理的 well-being」に対する、5 因子特性、「寛容性」の影響
(重回帰分析)

「心理的 well-being」に与える影響を検討するために、対象者全体（「心の支援者」と一般教員）に対して重回帰分析を行った。独立変数に Big Five 尺度の下位尺度並びに日本語版 Heartland Forgiveness Scale の下位尺度を設定した。その結果、「心理的 well-being」には、「外向性」（ $\beta = .206, p < .001$ ）、「開放性」（ $\beta = .201, p < .001$ ）、「調和性」（ $\beta = .135, p < .01$ ）、「自己・状況寛容」（ $\beta = .468, p < .001$ ）が有意な正の影響を与えていた（図 3）。

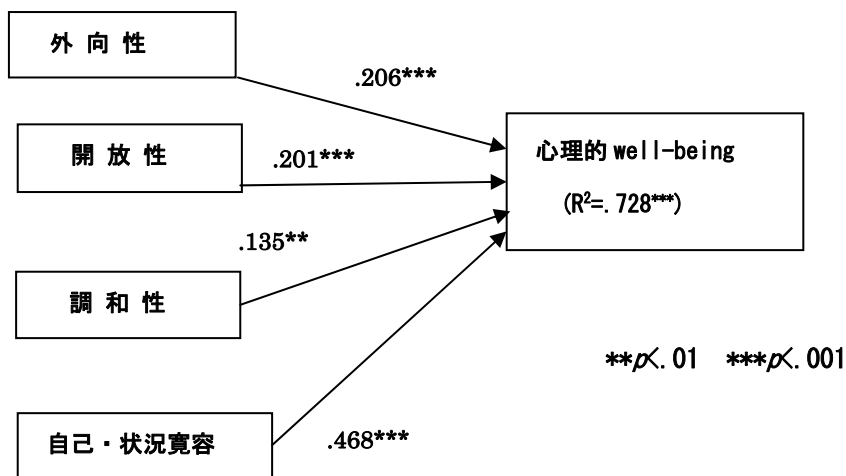


図 3 「心理的 well-being」に対する影響（対象全体）

10. 対象者全体における 5 因子特性、「寛容性」, 「心理的 well-being」の因果関係
(共分散構造分析)

「寛容性」と 5 因子特性が「心理的 well-being」に及ぼす影響を検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。まず、「寛容性」（自己・状況寛容，他者寛容）と 5 因子特性の全てが「心理的 well-being」に影響を及ぼすことを仮定して分析を行ったが、適合度が十分でなかった。このため、前項の重回帰分析を参考に、モデルを修正した結果、図 4 の最終モデルのようになった（ $\chi^2 = 46.27, df = 18, p < .001, GFI = .959, AGFI = .875, RMSEA = .087, AIC = 120.27$ ）。

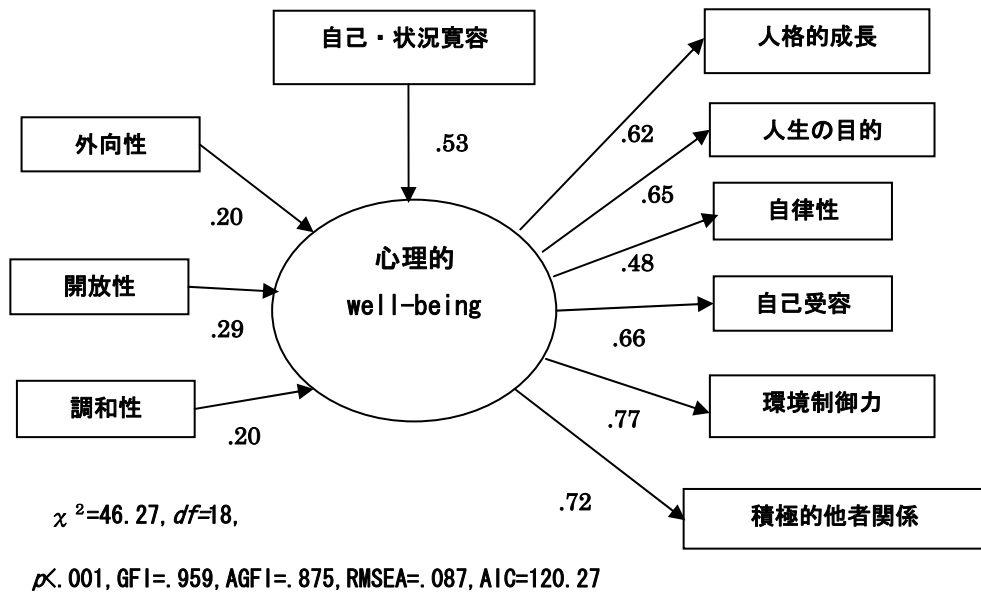


図4 5因子特性, 寛容性, 心理的 well-being の因果関係 (最終モデル)

V 考察

1. 「心の支援者」の「寛容性」と「心理的 well-being」の特徴 (仮説1, 2, 3の検証)

仮説1 (「心の支援者」は「寛容性」が高い)、仮説2 (「心の支援者」は「心理的 well-being」が高い) を検証するために、「心の支援者」と「一般教会員」の「寛容性」と「心理的 well-being」の平均得点について t 検定を行い、その結果、「寛容性」、「心理的 well-being」とも「心の支援者」が「一般教会員」に比べ高い得点を示した。また、仮説3 (「寛容性」が高い「心の支援者」は、「心理的 well-being」が高い) を検証するため「心の支援者」の「寛容性」の平均値をもとに「寛容性」高群と「寛容性」低群に群分け (他の群分けも同様に平均値による群分けを採用した) して、「心理的 well-being」の平均得点についての t 検定を行った。その結果、「心理的 well-being」について「心の支援者」の「寛容性」低群よりも「寛容性」高群の方が高い得点を示した。

このことより、「心の支援者」には、「寛容性」と「心理的 well-being」が高く備わっており、また「寛容性」が高い「心の支援者」ほど「心理的 well-being」が高いことが確認できた。研究の第一の目的である「心の支援者」の「寛容性」について確認することが出来た。また、相関分析からも「寛容性」と「心理的 well-being」の相関が強いことがあらためて確認することが出来た。

2. 「心の支援者」の経験年数による「寛容性」と「心理的 well-being」の相違（仮説4の検証）

仮説4（経験年数が長い「心の支援者」は「寛容性」が高く、「心理的 well-being」も高い）を検証するために、「心の支援者」を経験年数の平均値をもとに経験年数高群と経験年数低群に群分けして、「寛容性」、「心理的 well-being」の平均得点について t 検定を行った。その結果、「心の支援者」の経験年数高群と経験年数低群の得点差は確認出来なかった。臨床心理士においては、臨床体験を積むことにより、また聖職者においては、信仰経験を積むことにより、「寛容性」が高まり、それが「心理的 well-being」を高めると想定したが、確認することが出来なかった。

有意差のなかった項目についての解釈は慎重であるべきだが、「寛容性」が資質の類型からすれば、年齢を重ねるごとに身につける「外面的資質」より、生得的な「中核的資質」や育成的な「内面的資質」に影響をより受けるのかもしれない。すなわち、「寛容性」は経験要因に影響を受けにくい資質ではないかと考えられた。

3. 「心の支援者」の性別による「寛容性」と「心理的 well-being」の相違（仮説5の検証）

仮説5（「心の支援者」の「寛容性」、「心理的 well-being」には性別による差がある）を検証するために、男女の「寛容性」と「心理的 well-being」の平均得点について t 検定を行った。その結果、「心の支援者」の男女による「寛容性」の得点差、男女による「心理的 well-being」の得点差はともに有意ではなかった。因みに、対象者全体での男女差の検証では、男性の「寛容性」より女性の「寛容性」の方が有意に高かった。また、男性の「心理的 well-being」より女性の「心理的 well-being」の方が有意に高かった。

4. 「心の支援者」の「寛容性」と5因子特性（仮説6の検証）

仮説6（「寛容性」が高い「心の支援者」は、「情緒不安定性」が低く、「調和性」が高い）を検証するために、「心の支援者」の「寛容性」高群と「寛容性」低群の「情緒不安定性」、「調和性」の平均値について t 検定を行った。その結果、「心の支援者」の「寛容性」高群は、「寛容性」低群に比べて、「情緒不安定性」が低く、一方「調和性」は高かった。

また、「心の支援者」を対象に、「寛容性」を従属変数とし、独立変数に Big Five 尺度の下位尺度並びに心理的 well-being 尺度を設定し重回帰分析を行った。この結果、「寛容性」には、「情緒不安定性」が有意な負の影響を、また「調和性」と「心理的 well-being」が有意な正の影響を与えていた。このことは、先行研究の Emmons (2000), McCullough, et al. (1998), Worthington & Wade (1999) により、「調和性」と「寛容性」との正の相関関係が確認されていることや、McCullough (2000) により「寛容性」の高い者は、そうでない者よりも「神経性傾向」が低いことの報告と合致している。すなわち、「心の支援者」にとっても、先行研究と同様の傾向が確認された。

5. 5 因子特性と「寛容性」が「心理的 well-being」に及ぼす影響の一般化とその因果関係モデル（重回帰分析と共分散構造分析から）

「寛容性」をはじめとした資質が、「心理的 well-being」に与える影響を検討するために、対象を全体（「心の支援者」と一般教会員）として、重回帰分析を行った。その結果、「心理的 well-being」に対して、「外向性」、「開放性」、「調和性」、「自己・状況寛容」が正の影響を与えていた。とりわけ、「自己・状況寛容」は、「心理的 well-being」に対して比較的強い影響を及ぼしていた。

このことから、「心理的 well-being」は、日常的に心が安定し、日常生活の事柄でポジティブに感じられる精神状態とみることができる、例えば「外向性」、「調和性」といった資質にも影響を受けながらも、間違いを侵したり、失敗をしてしまった自分や、どうにもならないような状況について、受け入れ、許すことのできる「自己・状況寛容」が、「心理的 well-being」を高めることとなることが明らかとなった。自分を傷つけた者を許す「他者寛容」は、「心理的 well-being」への影響は示されなかった。

「他者寛容」については、「他者寛容」の習得の困難さが想定される。習得が困難が故に、心理的な健康への影響が少ない結果となったのではないかとと思われる。こうした傾向は、Mauger, et al. (1999)の他者に対する寛容性に比べ、自己に対する寛容性の方が、抑うつ、不安、怒り等のメンタルヘルスと強い関連を示すとした報告等の先行研究と合致するところとなった。

また、これらの因果関係について、一般化を図るために、共分散構造分析によるパス解析を行った。前述のとおり基本モデルの仮説を、前項の重回帰分析を参考にモデル修正した結果、適合度の向上が見られたので、最終モデルのようになった。このことにより、重回帰分析による影響の結果について確認が出来た。

Ⅶ 今後の課題

研究結果から、現在、現役で活躍されている「心の支援者」の資質についての実態が示された。また、こうした実態は、逆にこのような資質を兼ね備えた「心の支援者」が、支援される側からも求められているともいえよう。本研究では、「心の支援者」の十分なサンプルサイズ（調査数、幅広い年代層）を準備することが出来なかった。研究の限界と考えている。また、本論の「心の支援者」の「求められる資質」については、先行研究や社会的要請（例えば、「臨床心理士に求められること」は公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会の見解）等の論述に拠った。従って、今後は、「心の支援者」に対して、あるいは「心の支援」を受ける側に対して、「求められる資質」をどのように考えるか等についてさらに情報収集し、分析していくことが重要であると考えられる。

最後に、「寛容性」については、多分に西洋的文化・思想、宗教の影響を受けているため、日本においては、受け入れにくい概念であるとして、これまで研究が進められて来なかった。しかしながら、

今回の調査の結果から、確かに、日本の「心の専門家」あるいは「心の専門家」に準じた者が、有意に「寛容性」が高いことが証明されたことから、日本においても、この「寛容性」(forgiveness)が定着し、受け入れられる素地はあると思われる。従って、今後、一層要請が高まるであろう「心の支援」のためにも、「寛容性」研究が求められる。

本論文に関し、開示すべき利益相反(COI)関係にある企業などはない。

引用文献

- Emmons, R.A. (2000). Personality and Forgiveness. In M.E. McCullough, K.I. Pargment, & C.E. Thoresen(Eds.).*Forgiveness: Theory, Research, and Practice*. New York: The Guilford Press, pp. 156-175.
- 藤掛明・衣笠詩子(2010), 日本のプロテスタント牧師の疲弊研究: 牧師のストレス類型とその臨床像の検討. 聖学院大学総合研究所紀要, **47**, 38 - 78.
- Hochschild, A. R. (1983). *The Managed Heart*, Berkeley: University of California Press. 石川准・室伏亜希(訳)(2000). 管理される心—感情が商品になるとき. 世界思想社.
- 飯田昭人(2010). 対人援助職者の資質に関する一試論: 心理的援助における援助者側の要因に焦点を当てて. 人間福祉研究, **13**, 1-11.
- 飯田昭人(2013). 対人援助職者の資質に関する一試論(第2報): 内面的資質および外面的資質についての考察. 人間福祉研究, **16**, 83-88.
- 井奈波良一・井上真人(2010). 1年目研修医のバーンアウトと職業ストレスおよび対処特性の関係. 日本職業・災害医学会誌, **58**(3), 101 - 108.
- 加藤司・谷口弘一(2009). 許し尺度の作成の試み. 教育心理学研究, **57**, 158-167.
- Keys, C.L.M. & Ryff, C.D. (1998). Generativity in adult lives: Social structural contours and quality of life consequences. In D.P.McAdams & E.de St.Aubin(Eds). *Generativity and Adult Development*. Washington, D.C.: American Psychological Association Press, pp.227-263.
- 小堀彩子(2008). 専門的職業発達との関連でみた臨床心理士のバーンアウトの危険性: そのプロセスと予防. 公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会ホームページ. 「臨床心理士とは」, 「臨床心理士の職業倫理」.
- 久保真人(2007). バーンアウト(燃え尽き症候群)—ヒューマンサービス職のストレス. 日本労働研究雑誌, **558**, 54 - 64.
- Lief, H. I. & Fox, R. C. (1963). Training for 'detached concern' in medical students, in Lief, H. I., Lief, V. F., & Lief, N. R. (Eds.). *The Psychological Basis of Medical Practice*, New York:Harper & Row, pp. 12-35.
- Mauger, P. A, Perry, J. E., Freeman, T., Grove, D. C., McBride, A. G., & McKinney, K. E. 1992
The Measurement of Forgiveness: Preliminary Research. *Journal of Psychology and Christianity*, **11**, 170-180.
- McCullough, M. E., Rachel, K. C., Sandage, S. J., Worthington, Jr., E. L., Brown, S. W., & Hight, T. L. (1998). Interpersonal Forgiving in Close Relationships: II. Theoretical Elaboration and Measurement. *Journal*

- of Personality and Social Psychology, **75**, 1586-1603.
- McCullough, M.E. (2000). Forgiveness as Human Strength: Theory, Measurement, and Links to Well-being. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **19**, 43-55.
- McCullough, M.E. & Witvliet, C.V. (2002). The Psychology of Forgiveness. In C.R. Snyder & S.J. Lopez (Eds.). *Handbook of Positive Psychology*. Oxford: Oxford University Press, pp. 446-458.
- 西田裕紀子(2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究. *教育心理学研究*, **48**, 433-443.
- 荻野佳代子 (2004), 対人援助職のバーンアウト. 早稲田大学大学院教育科研究科博士学位論文審査要旨.
- 長内綾・古川真人 (2005). 日本語版 Heartland Forgiveness Scale の開発. *昭和女子大学生活心理研究所紀要*, **8**, 51-57.
- Price, D. & Murphy, P. (1984). Staff burnout in the perspective of grief theory. *Death Education*, **8**, 47 - 58.
- Ryff, C.D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.
- Ryff, C.D. & Keys, C.L. (1995). The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 719-727.
- 澤田忠幸・羽田野花美・矢野紀子・酒井淳子(2004). 女性看護師の職務満足と心理的 Well-Being に及ぼす個人特性要因の影響：中核的自己評価の役割. *日本看護研究学会雑誌*, **27**(4), 45-52.
- Thompson, L.Y. & Snyder, C.R. (2003). Measuring Forgiveness. In S.J. Lopez & C.R. Snyder (Eds.). *Positive Psychological Assessment: A Handbook of Models and Measures*. American Psychologist Association, pp. 301-312.
- Thompson, L.Y., Snyder, C.R., Hoffman, L., Michael, S.T., Rasmussen, H.N., Billings, L.S., Neufeld, J.E., Shorey, H.S., Roberts, J.C., & Roberts, D.E. (2005). Dispositional Forgiveness of Self, Others, and Situations. *Journal of Personality*, **73**, 313-359.
- 和田さゆり(1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. *心理学研究*, **67**(1), 61-67.
- Worthington, E.L. & Wade, N.G. (1999). The Social Psychology of Unforgiveness and Forgiveness and Implications for Clinical Practice. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **18**, 385-418.